ボントックの神父

マニラからバスで北上し、避暑地バギオに。出迎えてくれたアンドリュー神父の車二台に分乗して、さらに北のボントックに着く。

マウンテン・プロビデンス州の州都ボントックは山岳地方の中心都市の一つで山に囲まれた盆地である。

博物館のヤリを借りてアンドリュー神父と記念撮影

ルソン島北部の貧しい山岳民族の子どもの教育資金を援助する奨学金制度のフィリピン側の責任者であるアンドリュー神父は、この地方にたくさんいる山岳少数民族の一つ、ボントック族。ボントック生まれのボントック育ち。四十歳で明るく、ユーモアあふれる人である。

この地方の山岳少数民族を総称して「イゴロット」と呼び、昔は首狩り族として恐れられていたという。

ボントック博物館にはイゴロットの昔の生活様式や写真が展示してある。こっそり首狩りの写真をデジカメに収めたが、掲載するのはやめておこう。

団長の恩地神父は「首狩りといえば野蛮な民族と思われがちだが、日本でも戦国時代は敵将の首を取った。山岳民族は大自然を大切にしたやさしい農耕民族ですよ」と言う。

来る途中の山々の多くは山の頂上付近まで棚田が作られている。

しかし今、太平洋戦争や戦後の伐採によって山は保水力を失い、棚田は水不足。農耕民族は危機に直面し、若者は都市に出稼ぎに行き、高齢化と過疎化が進んでいるという。日本と同じである。

ボントックは二泊したが、泊まったところはキリスト教ボントック・ラガウェ教区の信徒研修所。広い施設に黙想を指導する神父もおられ、さすがアジア唯一のカトリック国である。

山の中腹にある研修所のテラスから眼下にボントック市内が一望できるが、津和野に似ている。

前方の山の向こうに日本の山下将軍が投降したイフガオ州の古都キアンガンがある。

敗走する日本軍は米軍の空からの攻撃を避けるため、夜、ボントックの中央を流れるチコ川に沿ってキアンガンに向かったという。

九死に一生を得た小川哲郎さんの著書「北部ルソン戦」によるとボントックでは八千八百人が死んでいる。

バギオの二万千百人に比べると少ないが、八千八百人とは大変な数である。

八カ月の間に二十五万人もの死者が出たルソン戦について私たちは日本人の死者にだけ目を向けがちである。

「北部ルソン戦」の最後に「（日本軍が）邪悪・背徳の行為を行ったことは否定出来ない。この戦争で夥（おびただ）しいフィリピン人の生命と財産を奪う結果となった。この客観的認識なくして戦争を語ることは出来ないし、語るべきではない」とある。

日本人だけでも八千八百人の死者を出したボントック。その地に生まれ育ったアンドリュー神父は、一言も戦争の話を口にしなかった。それでかえって胸が痛んだ。

戦争とは空しいものだ。その歴史は語り継がれなくてはならない。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

研修所から見たボントックの街